

巨根と噂の体育教師にメス顔を指摘され、指導という名の調教で処女まんこをぐちゃぐちゃにされ、おちんぼおねだり、中出しまで墮とされる教育実習生の話

サンプル（一部抜粋）

「頑張らなきゃ……！」

今日から始まる教育実習。体育の先生になるのが夢で、そのために今まで体育大学で頑張ってきた。

これから始まる3週間の実習さえクリアできれば……将来は安泰だ。なんて私は少し、浮かれていたのかもしれない。

早めに到着した実習先の高校。

「一ノ瀬舞です！よろしくお願いします！」

頭を下げ、ガヤガヤした職員室で挨拶をする。

私をチラッと見るだけの先生や、そもそも挨拶を聞いていない先生ばかりで、正直あまり雰囲気は良くなかった。

「……」

誰からも返ってこない返事…。

「えっと…あの…」

居心地が悪くキョロキョロするしかない状況で、次になんの言葉を発すればいいのか、まず何をすればいいのか…私は立ち尽くすしかなかった。

だけどその時、ガラッと私の背後で職員室の扉が開いた。

音に反応して後ろを振り向くと、身長が190cmはありそうな大きな男性が立っていて…じつと私の事を見下ろしていた。

顔は整っているけれど、圧を感じるほどの身長、服の上からでも分かるほどの筋肉。二の腕が私の太ももくらいの太さ…。威圧感に一瞬息をするのを忘れる…。

「……」

じつと私が話し始めるのを待つかのような、冷たい視線…。

それがなんだか怖くて、私は慌てて頭を下げながら挨拶をした。

「あ、あの…お、おはようございます！」

教育実習で来た一ノ瀬舞です…。

「…ああ。教育実習生か。よろしく。」

大きな先生は低い声で短くそう言うと、私の隣を通り過ぎていく。かすめるように私の服と先生の服が擦れる…。

ふわつと男らしい匂いが鼻をくすぐり、それがどこか怖くてビクッと身体が震える。さっきの大きい先生が指導担当じゃなければいいな…。もう少し優しそうな先生の方が…。そんな事を内心思う。

（中略）

「大黒…先生。」

小さい声で先生の名前は呼ぶと、大黒先生はギシッと背もたれに背中を押し当て、ふう…っと息を吐いて私に視線を移す。

「あ、あの…3週間よろしくお願いします…！」

私は立っていて、先生は座っている…。明らかに私の方が目線が高いのに、どうしてこうも威圧的な雰囲気を感じるのか…。

分らないけれど、声が小さくなって少し震えてしまっていた。

先生はじつと私の顔を見たあと、足元まで舐めるようにじろつと視線を流す。

「っ…」

まるで、身体の厚みや筋肉の質を確かめるかのような…値踏みされているような、居心地の悪い視線。身動きすら取れないような、取ってはいけないような空気。息が詰まるように喉が苦しい。

「…声が小さい。」

大黒先生は私をじっと見たあと、まっすぐに私の瞳を捉え、冷たくそう言い放った。
職員室の喧騒の中で、大黒先生の声だけが冷たいナイフのように突き刺さる。

「す、すみません…」

「今日は俺の授業を見ろ。明日以降の指導案は放課後に見る。

授業までその椅子に座ってろ。」

短く冷たい言葉…。

「はい…。」

とてもじゃないけど…歓迎されているようには見えない。

ただ先生の邪魔をしないように、物音を立てないように…先生の後ろの椅子にちょこんと座る…。

(中略)

「ねえねえ、舞せんせっ!」

と近くに居た茶髪のギャルっぽい生徒に声を掛けられた。

「うん…?」

しっかりと目線を合わせるためにその場でしゃがんでニコッと微笑んだ。

「先生って彼氏いるの?」

ニヤッとヤンチャに笑う女子生徒は、キラキラして可愛かった。

「え、彼氏…？」

「あー、それ私も聞こうと思ってた！」

周りにいた女の子達も私に近づいて、授業中なのにべらべらとおしゃべりを始める。

「い、今授業中だから…」

大人として注意をするけれど…

「えー、いいじゃん！で？彼氏いるの？」

と会話を強引に続けられてしまう。

「い、いないけど…ほら、ちゃんと柔軟しなきゃ…」

「え、元彼は？」

「いない…けど…」

「まじ!?めっちゃピュアじゃんwかわいいー♡舞せんせっ♡」

ゲラゲラと笑いながら囲まれて、会話に付き合わされてしまう。

「も、もう…ほら、ちゃんと柔軟しなきゃ…ね？」

大人として少し怒った顔を作って注意をする。でも…

「舞せんせー可愛いw」

とからかわれてしまうだけ…。

「ねえねえ、舞せんせっ！大黒先生の噂、しってる？」

「うわさ…?」

突然の話題に、思わず少し首をかしげて聞き返してしまう。大黒先生に適当に流せと言われていたのに。

「大黒先生、ちんこめっちゃデカいらしいw」

「…ち…?」

体育の授業とはあまりにも関係の無い内容で、こんな朝からするような話題でもなく…思わず卑猥なワードに脳がフリーズして目を見開いてしまう。

「あはは、先生ピュアーw」

「でもこの噂ガチらしいよw」

「でも先生、女に興味ないんでしょ？」

次々に紡がれる女子達の会話に着いていけず、呆然としながら

「え。あ、そうなんだ…?」

と軽い相槌を返してしまう。

「だってこの前、玲奈が先生のこと誘惑したらしいんだけど、マジで興味なさそうだったらしいw」

「先生カッコいいからガチ恋の子もいるらしいよw」

「うちらはただデカいちんこ見たいだけっていうねw」

「……」

つ…ついていけない…。生徒が先生を誘惑…？その…アレがデカいというものも…分からないし。男の人のそういうのを見た事がないし…。

相槌すらも打てずに顔を赤くしてその場でフリーズしてしまう。

でもその瞬間

「お前らなんの話してんだ。」

と低い声が斜め後ろから降り注いだ。

赤くなった顔のままビクツとして、慌てて後ろを振り返る。

その時、ふと先生の陰部が目に入る…。ど、どこ見てるの…私…！

慌てて更に視線を上げようとしたけれど…なんだか先生がさつきよりも男らしい感じがして変だった。

(中略)

「ひ…あ…見ないで…っ」

強引な先生の指…。服くらい簡単に引き裂かれてしまいそうな、筋肉…。

肌を撫でる倉庫の少し冷たい空気が怖くて、私は必死で首を横に振って、服を捲し上げる先生の手を握った。

だけど先生はそんな私の手に強引に指を絡め、恋人繋ぎのように手を繋いだ。

「…違うだろ？」

お前の為に特別な実習をしてるんだから、ちゃんと『見て』って言わないと。態度が悪いなら、この実習は無効にするよ。」

甘く絡まった指。もう一方の手は強引に服を押し上げたまま。

甘さと冷たさと酷い脅しに、頭が麻痺していく…。

「…見て…ください…」

汗だらけで汚いの…に…。なにより…胸を見られるなんて恥ずかしすぎるのに。

「…上手に言えて偉いな。この服、指導の邪魔だから自分で持て。」

見て欲しいんだろ？」

じわじわと逃げ道を塞がれ、大黒先生の思い通りに物事が進んでいく。

「はい…」

涙がすつと流れる。理由はもう…分からない。

指導のために、未来のために自分の服とブラをしつかりと掴む。片手はまだ…先生と繋がったままだ。

(中略)

「ごめん…なさい…」

意地悪な言葉は悲しいのに、ヒクヒクと身体が反応してしまう。

「…いいんだよ。」

大黒先生はフツと意地悪く笑って優しくそう呟きながら、強引にずるっと私の下着とジャージをまとめてずり下げ、マットの下へ投げ捨てた。

大きな両手が私の内ももをぎゅっと押し広げる。

「は…あ…」

先生の視線が私の恥ずかしい部分に突き刺さる。じつとりと薄暗い空間で全てを見逃さないように光る先生の瞳。

「先生…っ」

「…クリトリスがもうパンパンに腫れあがってる。

ここ、ずっとムズムズしてたんだろ？」

先生の片手が内ももから離れ、コリッとクリトリスを摺り上げられる。

「ひうつ…は…あ…あ…」

たった一回、刺激されただけでビリビリと処理しきれない快感が身体を走る。

服越しに先生の膝が当たっていた時とは全く違う、もっと直接的な快感。

「…困った子だな。」

先生はそう言いながら、両手で私の腰を掴み、強引に引き上げた。下半身がマットから浮いて、座っている先生の口元まで軽々と持ち上げられ、喉がつまって苦しい…。

なのにこれから先生の綺麗な口に、どうされるのか……気になって視線を逸らせない。

先生はそのまま自分の口を私の秘部に押し当て、じゅるじゅるとあふれ出た蜜を吸うように、音を立てる。

「は……ああ……っ……せんせ……っ、そんなところ……舐めちゃだめ……ですっ……」

恥ずかしい。汗だくで汚いの……躊躇なくそれを口にする先生にぞくぞくと身体が浮く。

「……言葉を間違えている。もうどう言えばいいか、分かるな？ちゃんと言い直しなさい。」

先生は舌を伸ばし、ツンツンと舌の先でクリトリスをつつきながら、私を試すようにそう呟く。
「……っ、は……あ……」

気持ちいい……むずむずして身体がおかしい。なのに……恥ずかしさで否定してしまった。私が……悪い……。

「……ごめん……なさいっ、舐めて……先生の口で気持ちよくしてくださいっ」
ツンツンと軽い刺激がもどかしくて、もう……抗えない。

「ちゃんとおねだり出来て偉いな。」

先生は甘やかすような声色でそう言う、じゅるじゅると激しくクリトリスを吸い、口の中でゴリゴリとクリトリスを舐めた。ざらつとした舌がクリトリスを弄ぶように、執拗に動く。

「ひあああつ、は……あああ……、や……熱い……っ、そこ……おおああ」

（大黒先生の鬼畜な洗脳調教の全容は製品版にて）